

県営かんがい排水事業

関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ

— 長浜市金剛寺遺跡 —

1984.3

滋賀県教育委員会
滋賀県文化財保護協会

県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書 I

——長浜市金剛寺遺跡——

1984.3

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

序

金剛寺遺跡は長浜市加田町に所在する遺跡で、今回県営かんがい排水事業に伴ない発掘調査を実施しました。金剛寺遺跡は天平年間の創建と伝えられる寺院跡ですが、今回の調査では、平安時代末期の土器類の一括資料を得ることができ、その一端を明らかにすることができました。滋賀県の埋蔵文化財に関する理解を深めていただく一助になれば幸いです。

最後に、この調査に御協力をいただきました地元関係者、関係諸機関および調査員の方々に対し厚くお礼申し上げます。

昭和59年3月

滋賀県教育委員会事務局

文化部文化財保護課

課長 外池 忠雄

例 言

1. 本書は、かんがい排水事業に伴う長浜市金剛寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、文化財保護課が、県農林部耕地建設課の依頼により予算（598,000円）の再配分を受け、財団法人 滋賀県文化財保護協会（理事長代理 辻 清）に委託して実施した。
3. 調査の体制は次の通りである。
 - 調 査 主 体 滋賀県教育委員会
 - 調 査 機 関 （財）滋賀県文化財保護協会
 - 調 査 指 導 滋賀県教育委員会 事務局 文化部 文化財保護課 技師 田中勝弘、
用田政晴
 - 調 査 員 （財）滋賀県文化財保護協会 技師 吉田秀則 嘱託調査員 角上寿行
 - 調査補助員 北川 保、萩野 勉、横田 正、北村和男、喜多貞裕
4. 本書の本文は、角上寿行が執筆したものを田中勝弘が加筆、補訂した。図版等については、全員の共同作業による。

目 次

序 文	
例 言	
1. はじめに	1
2. 位置と環境	1
3. 調査の経過	1
4. 調査の結果	4
イ. 遺 構	4
ロ. 遺 物	4
5. まとめ	8
6. おわりに	8

挿 図 目 次

図 1 遺跡位置図	2
2 トレンチ配置図	3
3 トレンチ断面土層柱状模式図	3
4 トレンチ16遺構実測図	5
5 トレンチ16出土遺物実測図(1)	6
6 トレンチ16出土遺物実測図(2)	7

図 版 目 次

図版一 (1)トレンチ16全景	図版三 トレンチ16出土遺物
(2)S K 1 近景	四 トレンチ16出土遺物
二 (1)遺物出土状態(1)	
(2)遺物出土状態(2)	

長浜市金剛寺遺跡

1. はじめに

長浜市加田町に所在する金剛寺遺跡は、『滋賀県遺跡目録』（昭和40年）によると、天平宝字6年 安澄創建の寺院跡とされている。しかるに、昭和58年度事業として県営かんがい排水工事が計画され、その配管場所が遺跡地を通過することとなり、事前に発掘調査を実施する必要性が生じた。

調査にあたっては、長浜市教育委員会をはじめ、地元の方々、かんがい排水事業関係機関の方々に色々とお世話になった。ここに記して謝意を表します。

2. 位置と環境（図1）

金剛寺遺跡は、長浜市域の南東部、長浜市加田町の集落の西側に位置する。湖岸下坂浜まで約1.6kmで、標高約90mの比較的低地に立地し、現況は水田である。

当遺跡は、天平宝字6年に、安澄により創建されたと伝えられるもので、往時は30坊あったという。正確な所在地は不明であるが、附近に阿弥陀寺前、寺前、堂の前、堂の内等の小字名があり、これら字名の残るあたりだろうとされている。同じ加田町内には、法華寺、青蓮坊、福林寺、阿弥陀寺等寺院の伝承地が多く、当遺跡もその一つである。

3. 調査の経過（図2・3）

金剛寺遺跡の位置は小字名から推察されたものである。このことからすれば、当該地には堂の内、堂の前の字名があり、事業地域の南端約200mの区間が相当する。しかし、周辺地形や遺物の散布状況等からもこのことを確証するものは見当らず、遺跡の範囲は不明であった。従って調査は、この小字名を含めてその前後をも調査対象範囲として試掘調査を行なうことにした。結果的に、小字堂の内、堂の前の200mを含み、前後延長400mの間で24ヵ所にトレンチを設定することとなった。各トレンチにみる断面土層は、基本的に耕作土下に灰色粘土、黄褐色及至淡灰褐色粘質土、青灰色粘質土、灰色砂層と順次堆積しているものであった。ただ、北部の1～7及び9・10トレンチにあっては、耕土を含めた第3層目の上面に、いわゆるスクモの薄層が認められた。これは、以南のトレンチでは確認できず、従って試掘範囲の南半部が微高地形を呈していることが知れる。しかし、ほとん



図1 遺跡位置図

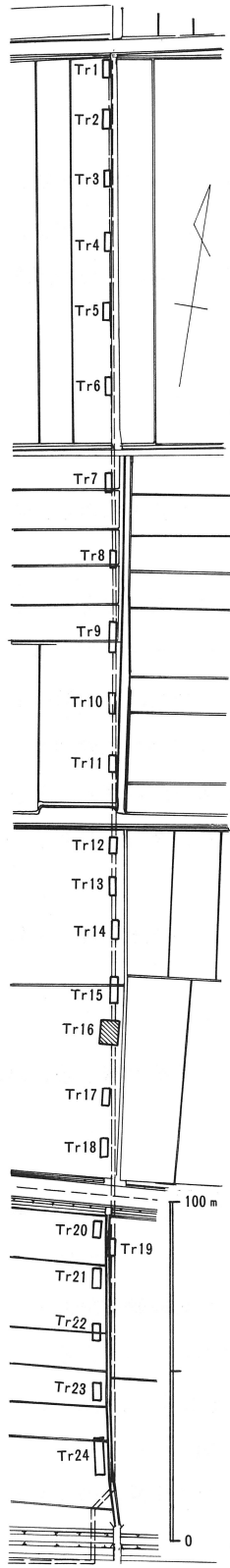
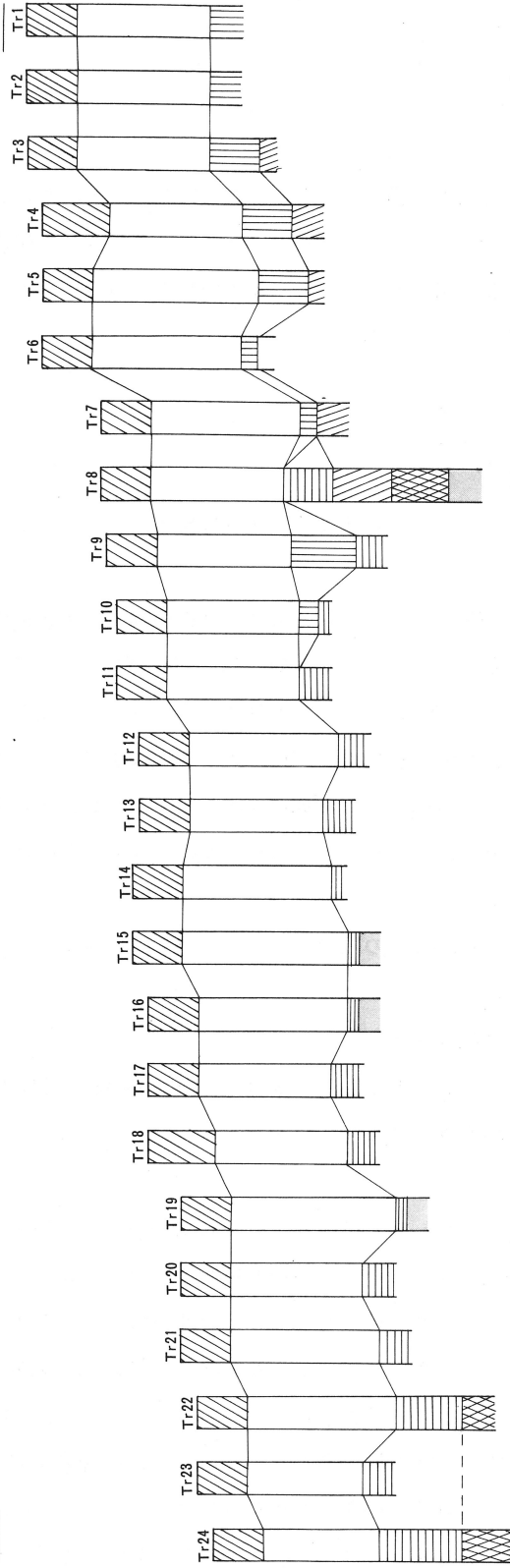


図2 トレンチ配置図

L=89.00 m



- 耕土
- 灰色粘土
- スクモ層
- 青灰色粘土
- 黄褐色粘質土
- 淡灰褐色粘質土
- 灰色砂土

図3 トレンチ断面土層柱状模式図

どのトレンチで遺構、遺物を出土することはなかった。ただ、唯一トレンチ16で、3層目を切り込んだ大型土壌（SK1）と小ピット（SP1）を検出した。このトレンチ16は、SK1の全容を追求するため、トレンチの拡張を行なった。以下では、トレンチ16の調査結果を報告することとする。

4. 調査の結果

イ. 遺構

トレンチ16で検出したのは大型土壌（SK1）と小ピット（SP1）の各1基のみである。

SK1 南北3.2m、東西2.3mで、北側が幅広い不正楕円形を呈するものである。この土壌は、南側に片寄って、南北約2.8m、東西約1.8mの規模で、やはり不正楕円形の2段目の掘り込みが見られる。従って深さは約50cmを計ることとなる。土壌内には3層にわたる堆積土が認められ、特に、二段目掘り方内に堆積する最下層には炭化物が比較的多く含まれていた。土壌内からは多量の土器が出土したが、その大半は土壌外から流入した状況にあり、堆積した各土層に包含され、埋置された状況にはない。また、礫石も混在し、中には焼石も含まれている。

SP1 径56～60cmの円形のもので、深さは14cm程である。壙内からは土師器の小皿が出土している。

ロ. 遺物（図5・6）

遺物はほとんどがSK1からのもので、土師器の皿、羽釜、甕等、山茶碗の椀、皿、鉢、壺等、須恵器の甕等が出土している。

土師器（図5）

皿（図5-1～35） 口径8～9.8cm、器高0.9～1.7cmの小規模なもの（A類）と口径14.8～15.8cm、器高2.2～2.8cmの大規模なもの（B類）とがある。皿A（1～30）はいずれも内彎気味の口縁部を持つもので、その外面に、口縁部下方、次いで口縁端部附近をつまんで横ナデする二断ナデ調整痕が見られる。外底部は未調整のまま残るものである。中には、口縁部下方、口縁端部下端、さらに口縁部をつまんで横ナデするもの（1・5・8・11・19・23～25・28・29）があり、これらでは、口縁端部が小さく内傾している。

皿B（32～35）も皿Aと形態、調整が同様のものである。口縁端部の様子も端部のナデ方により、内傾するもの、尖り気味に終るもの、肥厚して端面をなすものがある。

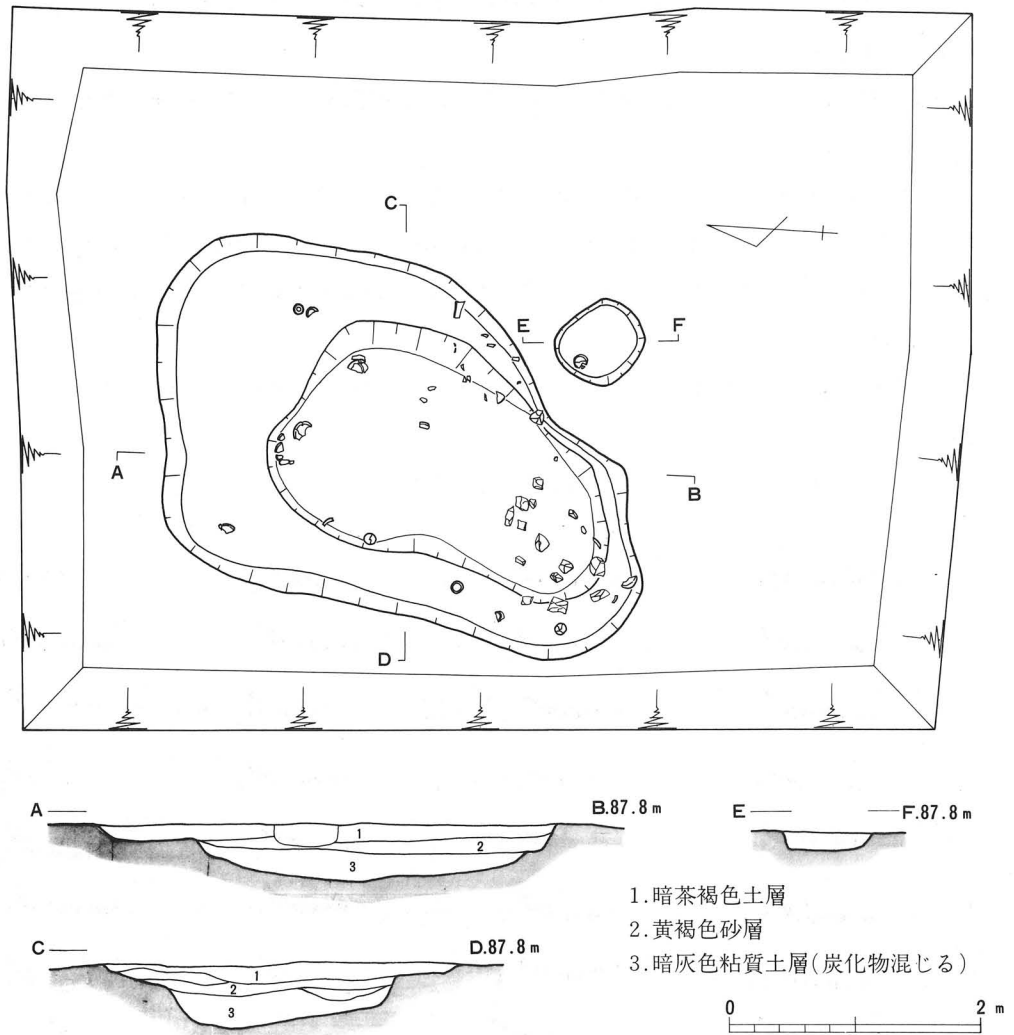


図4 トレンチ16遺構実測図

なお、31はSP1出土のもので、口径10.3cm、器高1.2cmのもので、口径がSK1のものに比べやや大きい。形態、調整はSK1のものと同様である。

山茶碗 (図6)

皿(1~6) 平底のもの(A類-1~4・6)と高台をもつもの(B類-5)とがある。A類は、口径7.5~8.6cm、器高2~2.3cmを計る。いずれも内彎気味の体部と小さく外反する口縁部を持つ。また、底部の知れるものはいずれも外底面に糸切り痕を残す。こ

これらのうち1は、他のものに比べて胎土が精良であり、外低面に墨書が見られる。「永」のくずし字であろうか。

B類は低い高台を持つものである。高台径4.2cmで、断面逆台形状で、端面に丸味がある。

碗(7・8・10・13) 7は高さ0.2~0.3cmで低く、幅も狭い高台をもつ。8は高さ0.5cmとやや高く、幅の広い高台である。7の高台端面にモミ痕があり、また、ともに外底面に糸切り痕を残す。体部はともに内彎している。10・13は口縁部で、ともに直線的で10は開きの大きいものとなっている。

鉢(11・12) 鉢形品と思われるものの底部で、11の内面はなめらかとなっており、練鉢を思わせる。

壺(10) 平底の底部片で、壺形品となるものであろう。

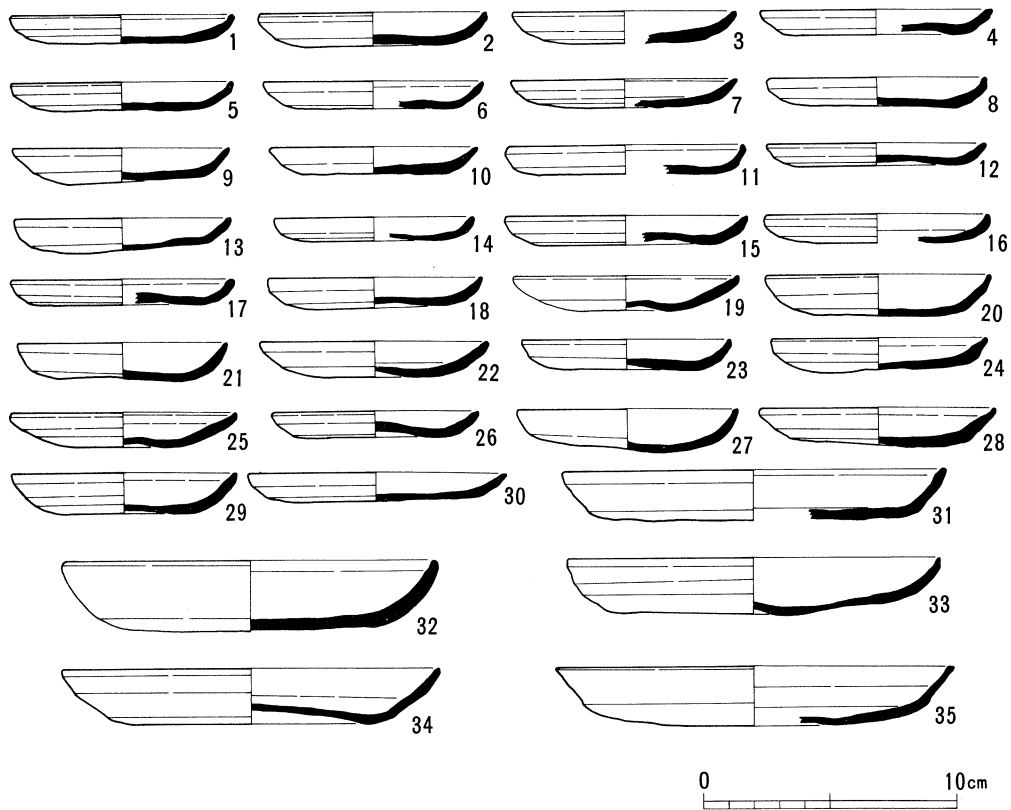


図5 トレンチ16出土遺物実測図(1)

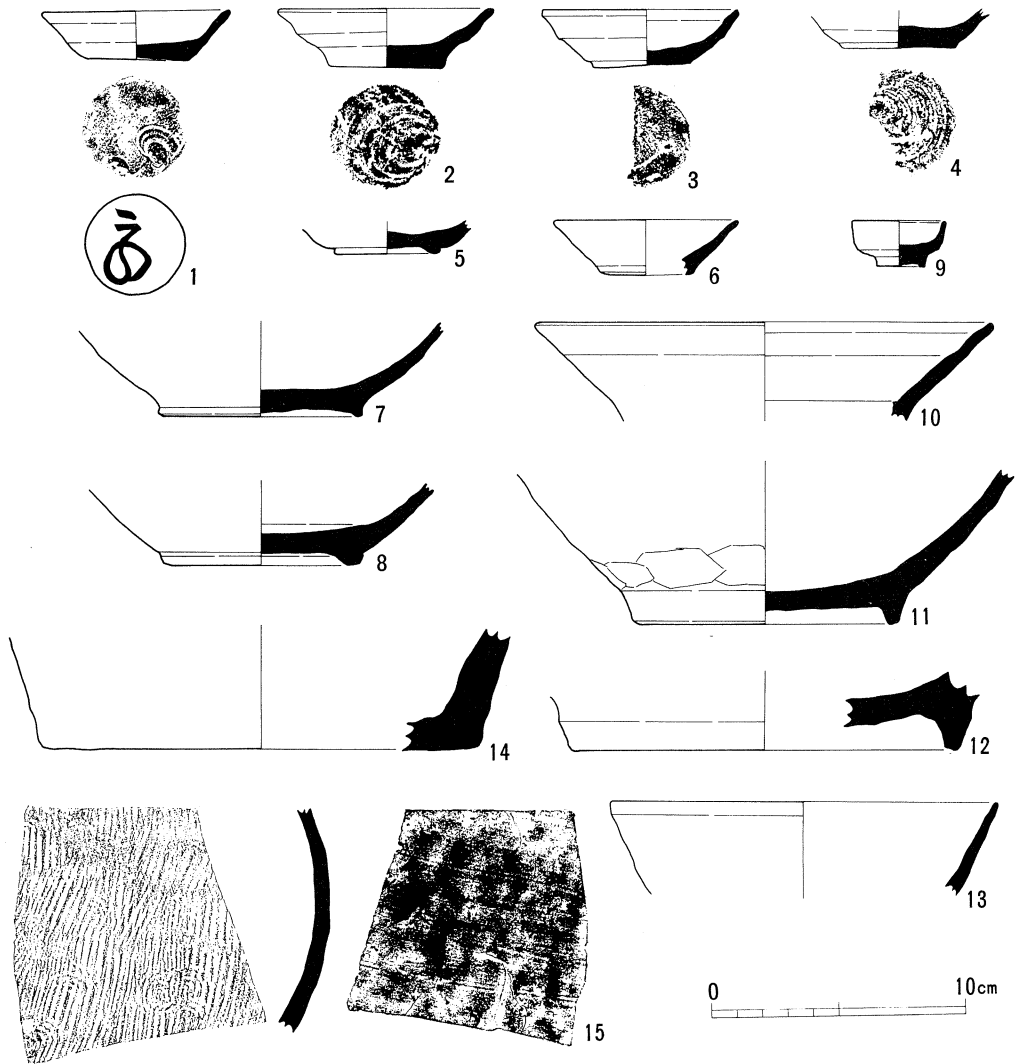


図6 トレンチ16出土遺物実測図(2)

碗(9) 口径3.7cm、器高1.8cmの黄灰色の釉のかかる小型品で、底部は押し型高台となっている。六器の一部であろう。

須恵器(図6-15)

甕形品の一部と思われるもので、外面に細かい条痕状の刻みをもつ叩き痕があり、内面は水びきのようにナデ調整している。また、外面の叩き痕の下に、同心円状の別の叩き痕が認められる。

5. まとめ

以上がトレンチ16の調査結果であるが、特にSK1から多量の土器類が出土している。SK1からは総数589点の土器片が出土しているが、このうち559点は土師器であり、全体の94.9%を占めている。次いで山茶碗で、須恵器は唯一1点である。土師器のうち、皿類と判断できるものは526点で、94.1%を占め、不明品を除いて他は、羽釜、甕類となっている。山茶碗では、27点中碗、皿類が21点で、77.8%を占め、他は鉢、壺類である。SK1の性格は明瞭でないが、このような出土状況を見ると、日常生活に伴う羽釜や鉢、甕、壺等が小数であるが含まれ、一般集落からの廃棄品を埋め込んだものと思われる面がある。また一方、全体に占める土師器の量が極めて多く、さらに皿類が94.1%、このうち、小皿が40%以上を占め、また、仏具の六器を思わせる小型の碗が1点であるが含まれていて、一般集落の日常性以外の性格を他面にもっている。穿って考えるなら、寺院からの日常廃棄品を埋め込んだとも考えることができる。

次にSK1の年代であるが、^①山茶碗の皿の図6-1~6は愛知県猿投窯の東山G101号窯式に相当し、鉢、壺を含む他のものは、器面の黒斑や砂質の胎土、焼成の甘さなどから渥美産と思われ、渥美1型式終末の惣作11号窯跡等が相当する。^②また多量の土師器の皿は、平安京左京八条三坊SD-24・25出土のものに類品があり、上記のこととあわせて、平安京IV期^④に相当させることができる。従って、SK1出土の土器類は、総じて12世紀後半代に置くことができよう。

6. おわりに

今回の調査は、寺院跡の検出に主眼がおかれたが、その結果は、大小の土壌を2基検出したのにとどまった。しかし、その出土土器類は、平安時代末期の年代観を知る上に貴重な資料を提供してくれた。また、出土土器に寺院での使用をうかがわせる一面もあり、今後の調査によっては、寺院に関連する遺構を検出し得る可能性が極めて高いものと考えられる。

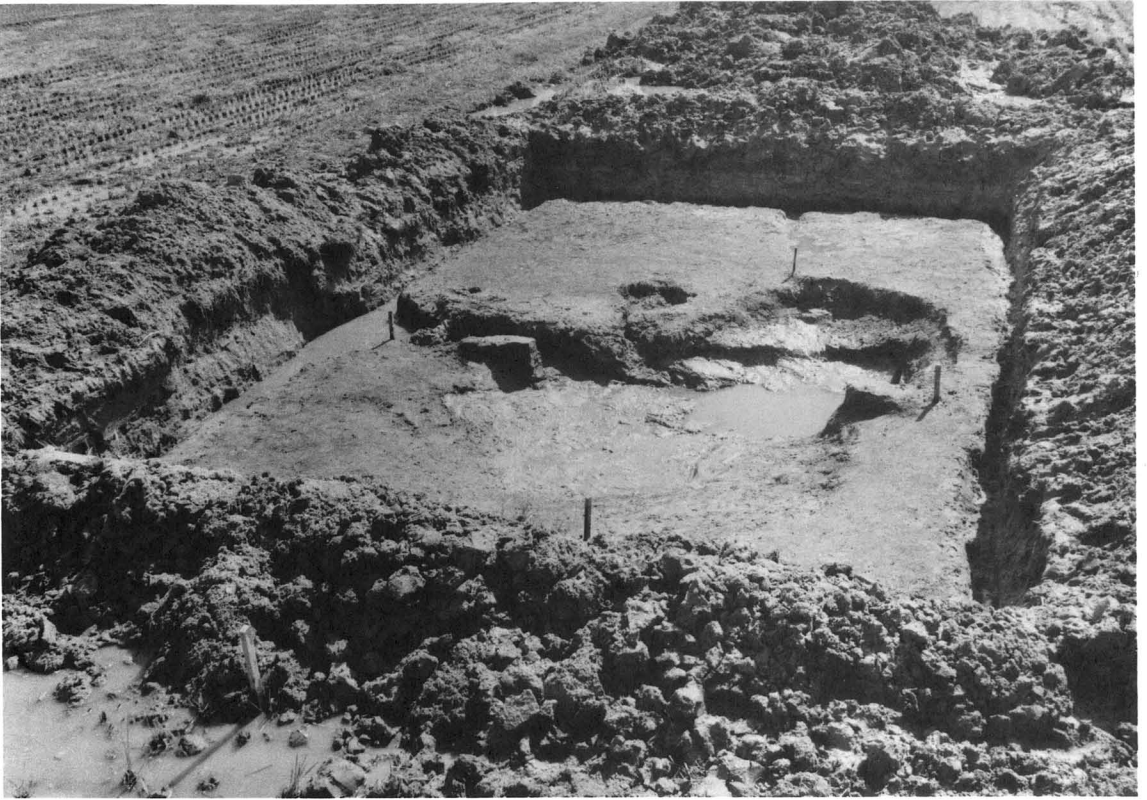
注

(1)山茶碗については、名古屋大学教授檜崎彰一先生に御教示いただいた。『東山-101号窯跡発掘調査報告』(愛知県教育委員会 1973年)

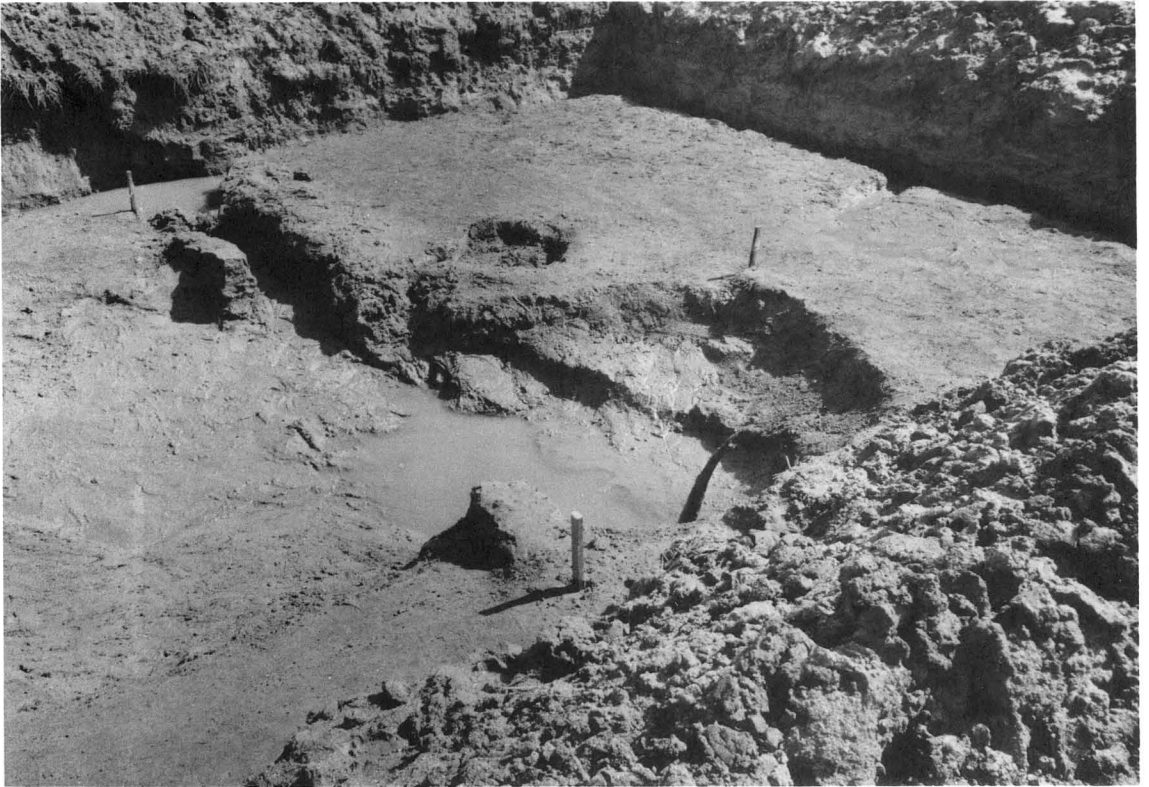
(2)小野田勝一「平岩古窯址群」(『渥美半島埋蔵文化財調査報告』 1967年)

- (3) 『平安京左京八条三坊』（『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第6冊 1982年）
- (4) 『京都大学構内遺跡調査研究年報』（京都大学埋蔵文化財研究センター 1979年）

版 圖



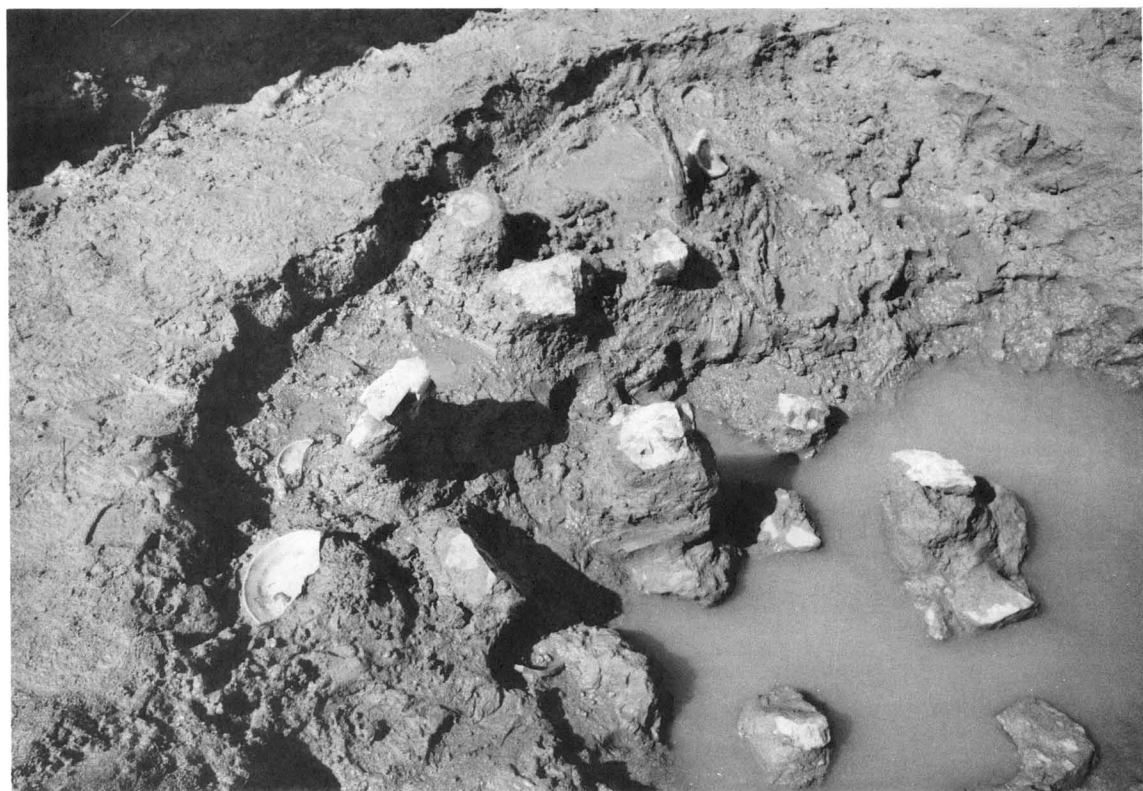
1 トレンチ16全景



2 SK1 近景



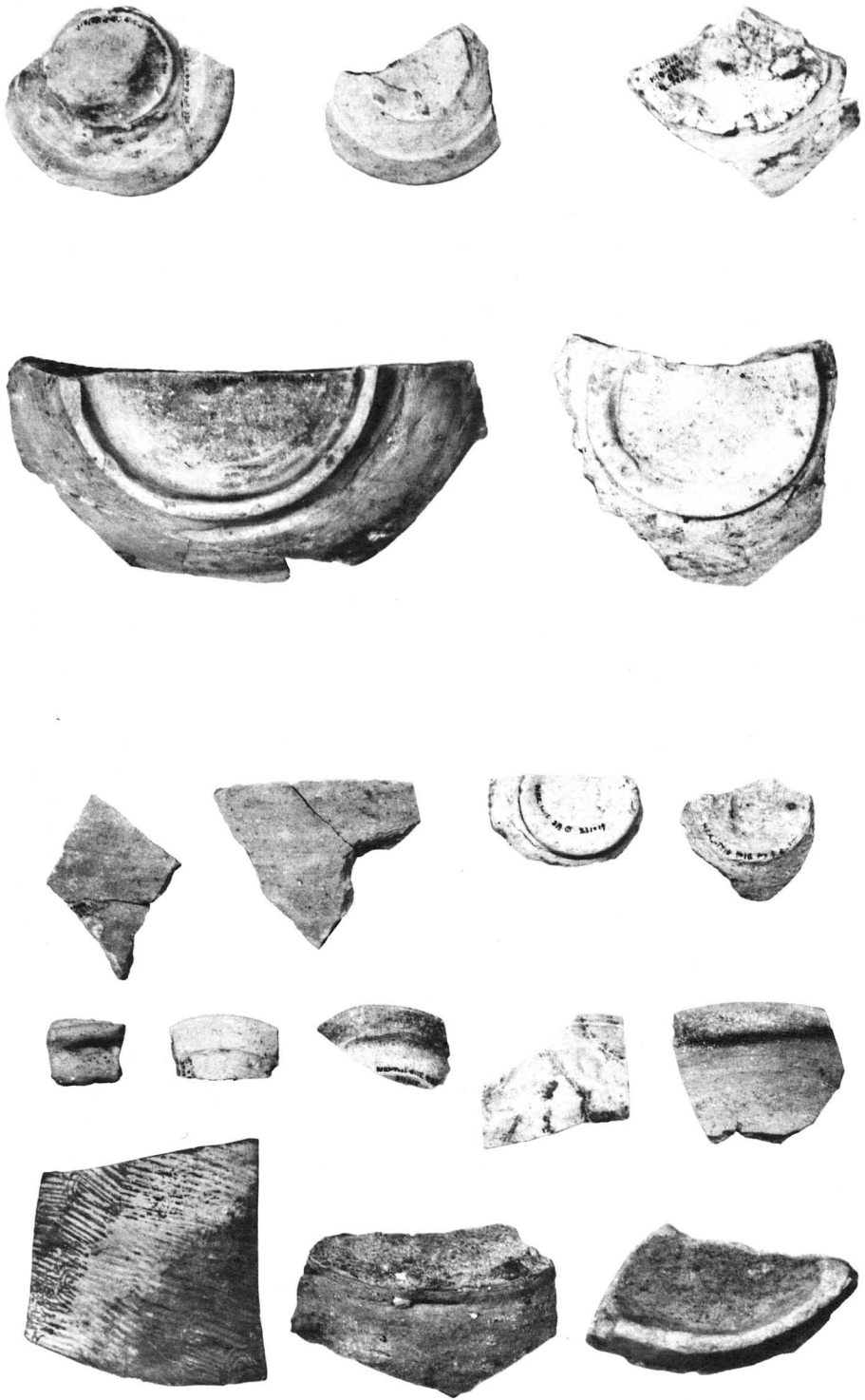
1 遺物出土状態(1)



2 遺物出土状態(2)



トレンチ16出土遺物 (土師器・山茶碗・墨書土器)



トレンチ16出土遺物 (山茶碗等)

昭和58年3月

県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書I

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

印刷 有限会社 真陽社

京都市下京区油小路仏光寺上ル

TEL (075)351-6034